

戦時下の「少国民」への啓蒙と普及 ——日本少国民文化協会の活動を通じて——

登坂咲代子
(玉井研究会 4年)

序 文

I 日本少国民文化協会の概要

- 1 協会設立の背景
- 2 概要と変遷
- 3 機関誌『少国民文化』と協会報『日本少国民文化協会報』

小 括

II 宣伝普及

- 1 機関誌『少国民文化』の発行
- 2 イベントの実施
- 3 紙芝居、壁新聞、書籍、挺身活動を通じた啓蒙

小 括

III 懸賞募集による宣伝普及

- 1 懸賞募集実施の背景
- 2 懸賞募集の実態

小 括

結 語

序 文

日本少国民文化協会（以下、少文協）は、太平洋戦争勃発直後の昭和16年12月23日に創立され、昭和20年10月頃までの3年10ヵ月続いた社団法人である。設立には官僚と民間の著名人が携わり、児童文化の国策協力団体として、戦時下にお

いて文化を通じた児童（少国民）¹⁾の思想統制に尽力した。

これまでの少文協に関する研究として、大正から昭和までの児童文化の変遷を追った浅岡靖央氏の『児童文化とは何であったか』²⁾や『1940年体制の児童文化』³⁾、少文協設立までの過程を詳細に記述した鳥越信氏の『日本少国民文化協会について』⁴⁾がある。山中恒氏の『戦争の中の子どもたち』では自身の児童期の体験談を交えつつ当時の教育を検証しており⁵⁾、櫻本富雄氏の『歌と戦争』では歌を通じた大衆の士気高揚を検討している⁶⁾。このように、少文協設立までの過程や各文化に絞った論文は数多く存在するが、少文協の事業内容を網羅的に解説した論文は管見の限り少ない。

そこで本論文では、こうした研究を踏まえつつ、少文協は「少国民」をめぐり、国民に対しどのような働きかけを行っていたのか、またそうした働きかけはどのように変容していったのかを考察する。

I 日本少国民文化協会の概要

本章では、少文協がどのような背景のもと設立に至ったか、その沿革や事業を辿り概説する。

1 協会設立の背景

本節では、日本少国民文化協会設立に至るまでの過程を解説する。昭和12年7月に勃発した日中戦争が次第に激化する中、日本政府は9月に国民精神総動員運動を開始し、翌年の昭和13年4月1日には「国家総動員法」を公布、国民と物資の総動員を目指した戦時統制を整えていく。この日の『日本学芸新聞』に、戦前から検閲を所管した中央官庁である内務省警保局図書課長の大島弘夫の談話が掲載されたことは、児童読物にも言論統制が及んできたことを意味している⁷⁾。大島は、「国民精神総動員下における児童読物が如何に重要であるかは充分承知してゐる」ため、「当局としては従来の消極的な取締り態度を一掃し、正しき日本文化の爲め、積極的に指導的役目を果たしてゆきたい」とし、国家総動員体制下での児童出版物統制への強い意欲を示した⁸⁾。同年10月には、児童文学、心理児童学、教育学等の分野を代表する専門家たち⁹⁾の協力のもと、内務省警保局図書課が「児童読物改善ニ関スル指示要綱」を通達する。従来の少国民文化運動は民間有志によっていたため一部の運動にとどまり、日本の戦時下における少国民全

体を包含する改善振興の運動となるまでには至っていなかった¹⁰⁾。そのため、この要綱は、日本における児童文化統制の嚆矢となり、終戦までの児童文化を規制した根本的な理念¹¹⁾となり、少文協成立の契機となった¹²⁾。昭和15年9月30日には、官民合同発起による「児童文化新体制懇談会」が開かれ、文学、演劇、紙芝居、出版、映画など¹³⁾、少国民文化各分野の関係者30数名が官民合同の強力な指導機関の設置を熱心に要望¹⁴⁾した。山本有三、城戸幡太郎、小川未明、百田宗治、波多野完治、阪本越郎、佐伯郁郎の七人が発起人¹⁵⁾となった。これを受け同年12月24日、大政翼賛会文化部の斡旋による官民合同の児童文化懇談会である「日本児童文化協会（仮称）設立準備懇談会」が開催された。翼賛会から13名のほか、佐伯郁郎を含む内務省以下、文部省、厚生省、商工省、情報局、興亜院、総力戦研究所、警視庁、軍事保護院、総勢15名の官庁側からの参加をみて、出席者は総勢80名となった¹⁶⁾。官民合同の強力な指導機関の設立を進めるという点で意見が一致¹⁷⁾し、同時に設立準備委員¹⁸⁾が選任された。昭和16年3月に日本児童文化協会設立の仕事の一切が情報局に移され¹⁹⁾、同年6月には「日本児童文化協会要綱」の最終的な決定を見る。これにより、主務官庁が情報局²⁰⁾と文部省になり、他の関係官庁とも緊密な連携をとることが定められる。同年8月1日、情報局講堂で日本児童文化協会設立連絡会が開催され、500数名の出席者が見守る中、事実上、協会が誕生した。席上、創立準備委員の銓衡は情報局に一任され、さらに山本有三以下17名の実行委員、北原白秋以下81名の各分課委員が委嘱された。同時に、山本有三以下7名の定款起草委員会も作られた²¹⁾。

同月13日に『週報』で設立が紹介された時点では「日本児童文化協会」の名称だったが、5日後の8月18日第一回の創立準備委員会での式上、児童という言葉が一般社会の通用語となっていないこと、協会の性格を規定する上からも児童という言葉では不適當であること等の理由により、上田課長は「児童」の名称に異を唱え、協会の名称として他に適當のものを選定したいとした²²⁾。その後、設立総会を迎えるまでのプロセスの中、山本有三の意向で、日本少国民文化協会という名称となった²³⁾。

12月23日の皇太子誕生日に九段の軍人会館で設立総会が行われ、創立発起人等の官民関係者300数名が靖国の神前で少国民文化の改善、向上、確立のために挺身することを誓った。新聞²⁴⁾はそれぞれ、当日の流れや決定した役員を詳細に報じたものの、大々的に取り扱ったわけではなかった。12月30日には、社団法人設立の認可を受ける。翌昭和17年2月11日の建国記念日には東条英機首相や谷正

之情報局総裁隣席のもと、情報局講堂にて発会式が行われる。政府も肩入れする団体であった²⁵⁾ことが伺える。発会式で早くも文学、舞踊、音楽、レコードの四部会共同作なる『日本のあしおと』が京橋区昭和国民学校児童の唱歌、石川漢門下の舞踊で発表された²⁶⁾。初会式についても同様に、新聞²⁷⁾は、式の流れと、式上発表された東條首相の祝辞を掲載した。内容は、いずれも大差ないものであった。設立総会と同様、記事の大きさや掲載位置から、メディアから注目度の高いニュースという扱いを受けなかったことが分かる。

2 概要と変遷

本節では、少文協の概要と変遷を解説する。上述の通り、文化人を結集して国策の宣伝と戦意高揚にあたらせようとする狙い²⁸⁾のもと、少文協は設立された。昭和17年2月17日銀座三越6階に構えた事務所を拠点に、本格的に活動を始動する²⁹⁾。

理事長は、小野俊一³⁰⁾が務めた。小野は児童文化とは関わりがなかったことから、政財界から文壇にわたる人脈、語学力と教養、豊かな資力を背景とした政治力への何らかの期待があつての起用と推測される³¹⁾。常務理事には、株式会社第一公論社社長で前満鉄参与の上村哲彌が、理事には、学校の校長や、国の関係者、会社の社長等、各界の著名人計13名が名を連ねる。人事は情報局が掌握し、理事に高村光太郎、山田耕伴、顧問に柳田国男、吉川英治、参与に内務省、情報局の役職者に並んで大政翼賛会文化部長の高橋健二ら文化人が、さらには、児童文化とは関わりのない軍人、華族、政治家等、幅広い経歴の人物が配されていた。

また、少文協は、『社団法人 日本少国民文化協会 設立趣意書・定款並 諸規定』において、設立の意義を明確に述べている。また、そこでは、「今回初等教育の全面的刷新を図り国民学校制を確立せることは一大躍進というべきも、而も、少国民の心性の陶冶、情操の涵養、性格の形成には、この国民学校に於ける教育の外に、更に少国民文化の各部門にわたる広汎なる協力を必要とすること論を俟たず³²⁾と、学校外における教育の重要性を説き、その一翼を担うことが示唆されていた。「少国民の一切の行動の原理たる思想」に最も大きく影響を与えるのは、「少国民文化」であるため、その確立によって皇国民の錬成に資すことを目指していた。大東亜戦争に勝ち抜くためには、武力戦だけではなく、思想戦、文化戦、道義戦においても勝利することが必要であり、これら抜きでは、武力戦の勝利も永続しない³³⁾と考えていた。

上記の目的を達成するために、「日本少国民観ノ確立竝ニ日本少国民文化ノ根本理念ノ究明」、「日本少国民文化政策ノ樹立竝ニ遂行ニ対スル協力」、「内外ノ少国民文化ノ研究調査」、「少国民文化財ノ生産、配給ニ関スル企画指導竝ニ斡旋」、「少国民文化財生産者ノ再教育竝ニ養育指導」、「優良少国民文化財ノ奨励竝ニ普及」の六事業が列挙された。優れた「少国民文化」を形成するために、少国民文化界における既存の病弊を根本的に削除するとともに、小党分立して有機的連関がなかった国民文化各団体を部門ごとに単一団体として統合し、強固な一元的機関とする³⁴⁾ことが規定された。

協会は、文学、絵画、童話、遊具、紙芝居、舞踊、音楽、出版、演劇、映画、蓄音機レコードの12部会から成る³⁵⁾が、実質的な活動は、部会によって差があった。また、少文協に所属した会員総数の正確な記述は機関誌、後述する協会報などには載っていないが、証言によると最盛期は約2000名にのぼったという³⁶⁾。

このようにして発足した少文協は、表面的には政府や軍の協力のもとに様々な対外活動をくりひろげていたが、その内情は必ずしも順風満帆ではなかった³⁷⁾。昭和18年5月7日付けの一文で、理事長小野俊一は、協会が必ずしも所期の目的達成のために円滑に運営されていない現実を受け止め、協会の本質が文化統制機関、国民運動的翼賛団体、あるいはその両者を兼ねるものなのか再確認することが必要との所感を示している³⁸⁾。

昭和18年6月には、「必勝18年の新方針、新事業」が講じられ、母の錬成、作家の錬成、海事思想の普及、航空思想、科学技術思想、健兵、強兵思想普及、愛国子守歌の制定³⁹⁾が行われる。この中には時局を強く意識したものもみられるため、戦局を鑑みた方策と考えられる。協会報⁴⁰⁾では、一面トップ記事としての扱いを受けたものの、機関誌『少国民文化』⁴¹⁾と同様、この取り決めが全部会役員会で定められたこと、会の流れ、参加者等、基本的な事項を報じる程度だった。昭和18年9月8日より「協会が真に決戦に即応する少国民文化の士気高揚指導に目的事業の方向を凝集せしめる」ため、定款の変更が行われた⁴²⁾。協会の目的に「聖戦完遂に挺身する」という文言や、協会の事業に、国策の啓発宣伝への協力、大東亜諸民族の啓発指導などが追加され、事業項目が11から13に増えた⁴³⁾。少国民文化関係者についてはこれまで「教育」「養成」「指導」という言葉が使われていた個所に、「組織」「動員」という言葉が用いられるようになった⁴⁴⁾。定款の変更で「企画指導」という言葉が消滅しているが、これは協会発足時に掲げていた、既存の少国民をめぐる文化団体に代わって少文協が少国民の文化財の一切

を取り仕切る「一元的管理」から事実上撤退することを意味していた。一方で、国策宣伝活動が追認された⁴⁵⁾。

昭和19年になり、空襲が激しくなると、少文協は学童集団疎開の慰問派遣センターとしての役割を担うようになった⁴⁶⁾。当初銀座三越ビル内にあった事務所も爆撃で焼け、昭和20年2月以降、持ち主が空き家になっていた本郷の民家に移転した⁴⁷⁾。後述するように機関誌『少国民文化』が告知もなく休刊した後も、少文協は活動を続ける。終戦後、協会は戦争協力していないため存続できるのではないかという希望的観測があったが、占領軍が統制団体の延命は許さないとすることが分かると昭和20年10月頃、一片の声明も出さずに解散した⁴⁸⁾。同年12月には、新聞に解散公告が掲載され、少文協は3年の歴史に幕を閉じる⁴⁹⁾。

3 機関誌『少国民文化』と協会報『日本少国民文化協会報』

本節では、昭和17年6月号から昭和19年12月号まで全30冊発行された少文協の機関誌『少国民文化』の概要と変革について述べる。『少国民文化』は、毎月1回1日に発行された。創刊号は140頁で50銭、廃刊号は40銭で32頁ほどに激減した。昭和18年から雑誌が徐々に薄くなるが、これは用紙統制という時代背景によるものであった。

機関誌『少国民文化』が創刊された際には、朝日新聞夕刊1面に広告を出稿している⁵⁰⁾。編集兼発行人は少文協理事長の小野俊一が、編集長は百田宗治⁵¹⁾が務め、後に内田克己が担当した。少文協の創立を契機とした日本の新しい「少国民文化昂揚運動」の力強い推進にあたり、国民学校や幼稚園の教員や家庭の両親兄弟など、少国民と近いところにいる一般社会の極めて多くの人々に十分な理解を持ってもらうために、会員内部だけの会報とせずに、会員外の一般人に広く売り出す月刊雑誌とされた⁵²⁾。なお、少文協の賛助員に対しては無料配布されることになっていた。発行部数は初年度事業計画によると1万部とあり、「毎号多大の反響を呼び、漸次購読者の増加を見つつあるが、さらに紙面の刷新を図り一段の普及を期している」と訴えかけたが⁵³⁾、実際の売り上げはあまり芳しくなかった。これについては、売れ行きや採算を求めて発行するのではなく、一般の認識が低いからこそ刊行するのであると弁じていた。また、協会報の中で佐伯郁郎は、「わが国における少国民文化が、いままでにあるべき理想にあつたなら、少国民文協もまた現在とは違った性格なり、使命なりをもつて結成されたであろうし、同様に機関誌『少国民文化』も別の性格のものとしてか、あるひは全然発行される要

がなかつたのかも知れない⁵⁴⁾と、機関誌『少国民文化』の存在意義について説いている。当時、新しい雑誌の発刊が禁止されていた⁵⁵⁾ので、昭和15年2月に創刊された有光社の季刊の綜合理論誌『新児童文化』も昭和17年5月に第4号を出して、『少国民文化』に統合された。そのため、いわゆる競合誌はなかった⁵⁶⁾。また、少文協文学部会の機関誌『少国民文学』は昭和18年5月に創刊されたが、8月号から『少国民文化』に統合された。

昭和19年3月号から買切制を実施することとなり、市販として店頭に出る部数も制限されることとなった⁵⁷⁾。続く4月号は、「用紙不足、印刷所の整備問題の影響を受け、4月号は遂に発行の時期に間に合はなかつた」として休刊した。「6月号からは大体準備もとのつたので、決してそのやうな迷惑はかけないですむと見る⁵⁸⁾」と発行を再開したが、同年12月号に断りもなく休刊したまま敗戦を迎える⁵⁹⁾。

誌面構成は基本的に、広告、写真、特集、座談会、詩・読物、推薦文化財月報、少国民文化展望、少国民文化ニュース、大東亜戦争日誌、協会の活動、編集後記などであり、少国民文化錬成に関する内容が多かった。「大東亜戦争日誌」は戦局報告の記事であるが、不利な報道は行われなかった。協会の上部組織や各界の著名人による論考が並ぶが、戦局の悪化、物資不足に伴い、質量ともに低下する。誌面は決戦、勤労、国防、疎開といった言葉で埋め尽くされるようになった。さらには、文化雑誌であるにもかかわらず、誌面で兵器に使う銀の回収の呼びかけ⁶⁰⁾がなされるなど、機関誌『少国民文化』は戦局に大きく左右されたのであった。

機関誌とは別に、協会報の概要も触れておきたい。協会報は昭和17年11月号の第一号から昭和19年2月の第十四号までの計14回、ほぼ毎月発行されたが、協会報には昭和19年3月号の第十五号をもって終刊⁶¹⁾と書いてある。協会報は発展的解消を遂げて機関誌『少国民文化』に吸収され、機関誌が会員に無料配布されることになった。用紙不足という時代の要請や機関誌との内容の重複等の実態を踏まえ、やむを得ず廃刊に至った。

小 括

日本少国民文化協会は太平洋戦争勃発直後の昭和16年12月23日に、次代を担う少国民を、文化を通じて錬成することを目標に創立された。役員には、文化人だけでなく、情報局関係者や教育関係者など多岐にわたる人材が選ばれた。少文協

は、設立時に戦時下における文化の指導機関としての活動内容を詳細に定めたものの、戦局の悪化に伴い、戦争への協力的な姿勢を強めていった。また、機関誌『少国民文化』は、特集、座談会、詩・読物等の企画を通じて少国民の育成に資する誌面構成であったが、次章で紹介するように、少文協自体の変容に伴い、内容を変えていった。昭和17年6月に創刊されてから、紙幅を大幅に減らしつつ、昭和19年12月に告知なしに廃刊した。

事業内容からは、文化の質の向上に向けた工夫が多岐にわたったことが窺える。

II 宣伝普及

本章では、少文協が少国民をめぐる行った宣伝普及活動を概説する。

1 機関誌『少国民文化』の発行

本節では、前章で概要を明らかにした機関誌『少国民文化』に着目し、その内容が時局の変化に伴い、如何に変容していったかを分析する。

まず「特集」のテーマについては、表1にまとめた⁶²⁾。特集が生まれ始めた昭和17年10月から昭和18年4月号までは、「紙芝居を検討する」や「童話のあり方」など、戦争に全く関係のないテーマを題材にしていた。しかし、昭和18年5月号以降は、「決戦下の科学教育」や「軍人援護」など、戦争に関連した特集が組まれるようになる。このように戦時色が強くなっていったのは、戦意高揚を促進しようという狙いによるものであった⁶³⁾。

座談会については(表2)⁶⁴⁾、開催時期と内容との明確な関係性は見られなかった。昭和18年6月号から「大東亜戦争と少国民」というテーマが選定されている一方で、戦局が厳しい状況である昭和19年8月号では「漁村における少国民文化」というように、時局との連関は見られない。しかし、「戦時下少国民の生活指導については種々の面がありますが、地域的に考へて特に漁村を対象として見ますと、これは海国日本として海軍、船員、船舶の問題など海洋への繋りは勿論、食糧問題に関係して水産といふ重要面がありますので、勢ひ特殊な少国民文化対策が必要である」⁶⁵⁾といったように、日常生活にも少国民文化を絡める強引さが散見されるようになる。表面面においても、昭和18年3月号の「武力戦に於ては、敵は外部にゐるのだが、文化戦に於ては敵は内部にもゐる。我等の蒙つた敵英米の文化的侵略は、その武力的乃至経済的侵略よりも、ずつと深かつたと云はねば

表1 機関誌『少国民文化』特集タイトル一覧

年	月	タイトル	年	月	タイトル
昭和17	10	紙芝居を検討する	昭和18	7	国民学校の鍛錬
昭和17	11	玩具の諸相	昭和18	7	少国民の鍛錬
昭和17	12	少国民演劇の新展開	昭和18	8	戦う日本母性
昭和18	1	少国民文学	昭和18	9	航空決戦と少国民
昭和18	2	童話のあり方	昭和18	10	軍人援護
昭和18	3	出版新体制と児童図書	昭和18	11	防空と決戦少国民
昭和18	4	絵画と少国民	昭和18	12	勤労と少国民
昭和18	5	決戦下の科学教育	昭和19	1	皇国の子供
昭和18	6	戦時下の少国民音楽	昭和19	2	大東亜共同宣言

表2 『少国民文化』掲載座談会 テーマ一覧

年	月	テーマ	年	月	テーマ
昭和17年	6	大東亜戦争と少国民	昭和18年	3	少国民生活と読書
昭和17年	7	国防国家と少国民	昭和18年	4	民族の力と少国民育成
昭和17年	10	少国民文化懇談	昭和18年	5	国民学校の理数と工作を語る
昭和17年	10	紙芝居の芸術性的問題をめぐって	昭和18年	11	防空と少国民防護
昭和17年	11	こどもの生活と玩具を語る	昭和19年	6	託児と生産戦線
昭和17年	12	演劇人に訊く 少国民演劇の現実と将来	昭和19年	8	漁村における少国民文化
昭和18年	1	少国民文化と少国民文学	昭和19年	11	疎開児童の新生活
昭和18年	2	国防教育と少国民	昭和19年	12	文化創造と科学教育

ならぬ。我等の内部に浸潤したこの文化的侵略を、痕跡をとどめぬまでに洗淨する事は、これは戦争以上の大仕事である。』⁶⁶⁾といったように、昭和18年3月頃より英米文化の排除の徹底が滲み出るようになる。なお、座談会への出席者は、昭和19年6月号以降から少文協役員の参加が減り、外部の少国民文化関係者が増える。

続いて、『少国民文化』に掲載された創作作品を検討する。詩については、昭

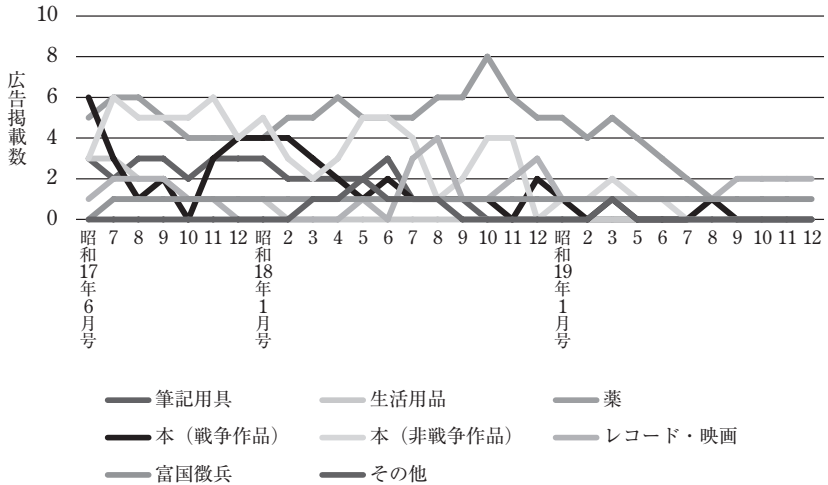
和18年4月頃から「兵発つ」や「山本司令官長の戦死」など、戦時色強い作品が掲載されるようになる。また、同時期から著名な詩人の作品に並んで、新人応募作品が掲載され始める。読み物に関して、戦争が強く意識され始めるのは、昭和18年1月号からである。「戦う日本艦隊——大東亜戦争を勇ましく勝ち抜く日本海軍艦艇部隊の話」や「戦争と船——大東亜戦争を勝ち抜くためにはどれだけ船が必要か」というように、特集や座談会など他の企画より早く戦時色が強まる。

前述の通り、『少国民文化』が発刊されたのは、昭和17年6月、ミッドウェー海戦が行われた頃である。創刊号と続く第二号は、「グラヴィア」と称される、戦局の様子を写真で伝えるページが3頁ずつ巻頭に掲載されたが、わずかに二号でこの企画は廃止された。劣勢になり、掲載する写真がなくなってしまったからであろう。

また、誌面に掲載された広告からも、国民とりわけ少国民に求められることが分かる。広告の傾向については、図1にまとめた⁶⁷⁾。ほぼ全号にわたり出稿していたのは、富国徴兵保険株式会社のみであった。書物の広告が最も多く、医薬品がそれに次いだ。歴史や教育、科学などを取り扱った非軍事の民生関連の書物の広告は、銃後生活や軍隊を題材にした戦事作品のそれより、広告掲載回数が総じて多かった。医薬品の広告は、ビタミン剤や栄養剤、育毛剤など様々であった。なお、当初は掲載されていたクレヨンや絵の具など、純粋に子供が使い、文化の育成に役立つような商品の広告は、昭和18年10月号頃から次第に掲載されなくなっていった。一方、昭和18年9月頃から東宝や松竹など映画の広告の掲載回数が増える。題材は、戦時関連である。東宝の「決戦の大空へ」⁶⁸⁾や、松竹の「海軍」⁶⁹⁾、映画配給社の「マレー沖海戦」⁷⁰⁾等が挙げられる。それぞれ、「空は男の征くところ！ 飛行服は男の晴着だ！」、「真珠湾底に輝く不滅の海軍魂！」といったように、軍隊への憧憬の念を植え付けるもの、「素晴らしい影絵映画の出現！」といったように、鑑賞意欲を仰ぐ文言が添えられていた。

少国民の文化を題材にした質問コーナー『少国民文化相談』も昭和18年代から開始される。読者から募った質問に少文協の関係者が答えるコーナーである。例えば、次のような質疑応答がなされる。「六歳の女の子ですが、どうも落ち着きがなくて困ります。どんな玩具を与へたらよいですか」という問いに対して、少文協研究所の竹田俊雄は、「絵合せ」とか「はめ絵」のやうな興味をもつて遊ぶうちに落ち着いて考へることを要する玩具や、「輪投げ」・「お手玉」のやうな心を集中して遊ぶ玩具が適当です。また「積木」などを与へて、組立てたり、工夫した

図1 『少国民文化』に掲載された広告



りしてゐる間に、次第に一つのことに永続きができるやうに導くこともよいであろう。』⁷¹⁾ と回答する。非軍事の日常生活の空間は、一定程度堅持されていたことが分かる。

2 イベントの実施

少文協による啓発普及は、『社団法人日本少国民文化協会要覧』においても少文協の重要な三つの役割の一つとされており、短い活動期間の中で熱心に取り組まれた事業であった。「少国民文化財生産者の向上を図り優良な少国民文化財の生産がおこなわれても、配給享受が適正でなかったならば協会の目的は十分に達成できない」という理念のもと、一般に対する講演会、講習会、少国民文化大会、展覧会等、各種イベントが開催された。昭和17年3月に全国25都市で開催された「少国民文化宣揚講演会」を皮切りに、頻繁に開催されるようになる。「少国民文化宣揚講演会」⁷²⁾ は、宣伝に時間がなかったため想定とは異なり、父兄ではなく少国民が主な参加者となってしまったが、これを機に、対象や目的の明確に定められたイベントが開催される。少文協による一般大衆向けイベントは、表3の通りである⁷³⁾。

イベントは主に、「絵や企画を一定期間会場に並べ広く人々に見てもらふ展覧会」と、「会場に人々を集め、少文協の関係者からのスピーチや公募企画の表彰、

表3 イベント一覧

年	月	イベント名	主催/後援
17	3	少国民文化宣揚講演会	少文協/情報局、文部省、大政翼賛会、全国官民
	3	誉の家の「ヨイコ」表彰式	市銃後奉公会総合会
	3	大東亜戦争と少国民展覧会	少文協
	4	少年保護記念展	少文協、司法保護協会
	4	少国民向き良い本の選び方展覧会	文学・出版・絵本の三部会の協力
	7	海の少国民大会	
	10	軍人援護少国民文化大会	少文協、軍事保護院、軍人援護会
	11	全国少国民ミンナウタへ大会	少文協、日本放送協会/情報局、文部省
	12	大詔奉戴一周年記念大東亜少国民大会	東京朝日新聞社、東京府、市、大日本興亜同盟、少文協/文部省、大東亜省、情報局、大政翼賛会、日本放送協会
	12	「少国民ちかひの大会」	少文協、朝日新聞社/情報局、文部省、日本放送協会
18	2	戦時下の玩具与へ方展覧会(東京)	少文協/情報局、文部省、商工省、厚生省、東京市
	3	生産増強に小戦士を送る大会	少文協、東京府、市、産報、東京産報、大政翼賛会/情報局、文部省、陸軍省、海軍省、厚生省、開催地市、協賛、大政翼賛会、大日本産業報国会、新聞社
	6	神国少国民大会	国学院大学修練報国団、教養部少国民文化班/少文協、大日本神祇会他諸団体
	7	海行く少国民大会	船舶運営会、日本海運協会、毎日新聞社、少文協/情報局、文部省、海務院、東京都
	8	軍人援護紙芝居入選作品披露会	
	9	少国民海の展覧会	少文協/情報局、文部省、海軍省、大東亜省、海務院
	9	生産増強少戦士激励少国民征空大会	少文協、大日本飛行協会、東京産報、東京朝日新聞
	11	第二回大東亜少国民ミンナウタへ大会	
	12	軍人慰問帖展示会	
	12	少国民文化報国挺身隊の結成式	
19	2	大東亜少国民結集大会	少文協/情報局、大東亜省、東京都、日本児童遊園協会
	3	少国民総進軍大会	少文協/情報局、文部省、軍部厚生省、大日本産業報国会、開催地都道府県市、日本新聞会
	5	少国民海軍大会	少文協、海軍協会東京都支部/情報局、文部省、海軍省、東京都
	6	菅公会	少文協、菅原道真公御生誕一千百年讃仰会/情報局、文部省、神祇院、東京都
	6	文化財展示実演会 空襲挺身活動用	
	10	少国民絵画普及常設展	
	11	愛国子守歌発表会	

合唱等が行われる大会」の二つに大別された。昭和17年は展覧会の方が大会より多く開催されたが、昭和18年とりわけ下半期以降になると、開催の頻度は半々になった。また、昭和17年には協会の目的に即して「少国民文化」「少国民文化財」に関係する大人を対象にした行事が行われたが、その一方で、少国民に直接的に働きかける行事も多く実施されたことは注目に値する⁷⁴⁾。

表3から分かることは、主催や後援に国の機関や省庁、新聞社や放送局などのメディアが多くかかわっていることである。特に、機関誌『少国民文化』の誌面でも繰り返し取り扱われた「全国少国民『ミンナウタへ』大会」や「大詔奉戴一周年記念大東亜少国民大会」、「少国民ちかいの大会」等の主要なイベントは、いずれもメディアが共催していた。また、「大東亜戦争と少国民展覧会」や「少国民向き良い本の選び方展覧会」、「少国民保護記念展」等、そごうや三越、松屋等の百貨店を会場にしたイベントが散見される。百貨店は現代でも美術をはじめとした展覧会の会場として使われるが、戦時中も同様に集客を見込めるパネル形式の展覧会の会場として重宝されており、こうしたイベント自体も戦時下の主要なメディアとしての役割を果たした。そのため、街頭・店頭が国策プロパガンダの場として重要性を帯びていった⁷⁵⁾。

一方、大会と分類できるイベントは主に国の会館等で開催され、少国民のみならず教育関係者や「大東亜共栄圏」下の他国の少国民が集った。日本全国のみならず他国の子供と、音楽を通じて少国民の団結を強化しようとするイベントが行われたのである。少文協が日本放送協会と共同で主催した「全国少国民『ミンナウタへ』大会」は、その典型である。ラジオの中継により全国地方会場に伝えられ、同一時に同一の歌を一斉に歌唱するという企画が行われた。同じ歌が同時に歌われることによって、第一回の大会では（朝鮮半島、台湾、樺太を含む）日本国のうちにおいて「国家」が想像され、第二回では「大東亜共栄圏」において「共栄圏」が想像されたことが推測できる⁷⁶⁾。

表3からは除いたが、満を持して開催された上記のイベント以外としては、毎月行われた「少国民演劇教室」がある。演劇部会加盟の各劇団が、毎週土・日曜の午後芝区青年団会館に交代で出演した。演劇中心の「少国民文化財」の鑑賞または発表を通じて、想像力や情操を養い、皇国民の錬成に資することが目的であった。

上記のように、少文協によるイベントは数多く開催されたが、必ずしも順風満帆というわけではなかった。イベントは、少国民とその保護者を含む一般人を直

接の対象にして戦争の遂行国策を啓蒙宣伝する活動であって、文化財の一元的管理とはまったく性質を異にする事業であった。こうした現実には協会内部でも自覚されており、紙芝居検閲が始まる直前の、1943年1月に開かれた幹事長・理事長会議では、激しい議論が行われている。その結果、日本少国民文化協会は、「文化財統制と国策宣伝との両方の性格を兼ねた組織」として運営されていくこととなった⁷⁷⁾。また、少国民の戦意高揚をめざした絵画の展覧会が中止になったこともある。絵画部会が、「決戦少国民」絵画展覧会の実施は、宣伝ツールとして不的確であると反対したのである。イベントによる少国民の錬成及び国策の啓蒙と普及の有用性は、少文協内で意見が割れていたことから、成功したとは言い難いようである。

人を集めて行われる公式のイベントは昭和19年11月の「愛国子守歌発表会」が最後となった。「愛国子守歌」に関しては後述するが、公募から発表まで1年がかりの主要な懸賞募集の企画である。11月20日のステージで歌ったのは、当時童話界歌手として人気のあった松田としと安西愛子であった。第二席のレコードはビクターから発売される予定であったが、発売前に工場が空襲で焼けてしまった⁷⁸⁾。

3 紙芝居、壁新聞、書籍、挺身活動を通じた啓蒙

本節では、前述した機関誌『少国民文化』と少文協開催のイベント、そして第三章で触れる公募企画以外で、少文協が行った宣伝普及活動に考察を加える。

昭和17年、日本少国民文化協会発足を記念した紙芝居が制作された。「皆さん方日本の少国民をほんたうに強く正しい皇国民に育てるにはどうすればいいか、それをよく相談して実行していくための日本少国民文化協会」と、設立趣旨を児童向けに説いていた⁷⁹⁾。設立趣意書の内容がほぼそのまま紙芝居となったのである。少文協の設立や存在を、紙芝居を通じて少国民に知らしめようとする姿勢が見てとれる。

昭和17年11月以降は、大政翼賛会宣伝部との共同企画で壁新聞の発行が実施された。毎月2回、毎号無料で六大都市の国民学校1500校全部に昭和17年11月より配布した。ゆくゆくは全国の国民学校に配りたいとの意気込みも報じられた⁸⁰⁾。第一号の主題は本年の豊作にちなんで新穀感謝とし、その詩および絵画をもって構成、第二号は少国民の体錬を主眼とする健民思想徹底がテーマ⁸¹⁾になっていた。文化というよりは、戦時下を生きる少国民たちのあるべき姿が主題であった。

また、少文協が、文部省推薦図書として編集に関わった出版物も発行された。昭和17年、軍事保護院、陸・海軍省、情報局、文部省の後援で、日本少国民文化協会が全国募集した少国民の作品（入選）集⁸²⁾である『九軍神の御霊に捧ぐ』や少文協会員から募った作品を掲載した昭和19年2月の『少国民詩・年刊I』、『少国民科学・年刊I』、『少国民文化論・年刊I』等である。さらには、文学部会による「少国民文学確立のための文学雑誌」である『少国民文学』の発行⁸³⁾も行われた。前述の通り、やがては少文協の機関誌『少国民文化』に統合されることとなる。

さらに、少文協は新聞においても啓蒙活動を行っている。広告欄への広告出稿のほかは、昭和18年7月下旬に4日間にかけて、読売新聞に「オモチャ戦時色」という連載を掲載している⁸⁴⁾。機関誌『少国民文化』でもおもちゃについての記事をもっていた竹田俊雄が、少文協が推奨する少国民の玩具を毎回ひとつ解説する。機関誌のみならず広く人々に行き渡る一般紙においても、玩具の素材から遊び方、注意点などを訴えることで、少文協の存在感や使命を示そうとしたことが分かる。

一方、少文協は、上記の活動とは全く性質の異なる活動にも傾注することとなる。昭和18年12月の「少国民文化報国挺身隊」の結成は、9月の定款の変更を受けてそれが具体化された典型である。挺身隊は12月23日には早速、都下84か所の戦時託児所に童話部隊と紙芝居部隊を派遣して、「一斉挺身奉仕」活動を行った。その後も、戦時託児所の幼児から工場の少年少女工具まで幅広い少国民を対象に、童話・演劇・舞踊・玩具・絵画などの部隊が単独あるいは合同でそれぞれの特長を生かして活発に挺身していった⁸⁵⁾。以後、紙芝居、童話など挺身活動は日本少国民文化協会の主要な活動となっていく。この挺身活動は大人が子供に向けて行うものであり、それにあたってはまず大人が動員・統制されることになる。このことは、同協会が当初から、少国民に文化財を供給する大人の啓蒙・統制を目的としていたことを物語っていた⁸⁶⁾。

小 括

少文協は、機関誌『少国民文化』の発刊やイベントなど、あらゆる側面から、少国民の啓蒙普及を目標とした活動に取り組んだ。同誌の内容は、文化関連のものから次第に戦争や軍事関連の色彩が強くなるが、必ずしも戦時色、一色に塗りこめられていたわけではなかった。イベントは、東京都内を中心に、大会や絵画

の展覧会など、数多く展開された。その他にも、少文協は、壁新聞や書籍の発行、挺身活動の展開など幅広い事業を展開していった。しかし、戦局の悪化や協会内での意見の不一致などの要因により、当初掲げた「文化を通じて少国民の育成に資する」という理想からはかけ離れていった。

Ⅲ 懸賞募集による宣伝普及

本章では、少文協が少国民をめぐって行った懸賞募集による宣伝普及活動に検討を加える。

1 懸賞募集実施の背景

少文協は、『社団法人 日本少国民文化協会要覧』で掲げた事業内容の中で、少国民文化財生産に対する各種の指導、奨励、斡旋を定めていた。その具体的方策として、読み物・演劇・映画・紙芝居等の脚本、童話話材、歌曲等多方面にわたる懸賞募集等の方法によって優秀作品の出現を促すことを目指した。本節では、これらの視点から、少文協による懸賞募集について検討を加えたい。

公募企画の盛り上がりは、その時代背景によるところが大きい。歌謡の公募企画は、当時、頻繁に展開された。ラジオの出現や映画の出現により、主題歌と呼ばれる歌謡曲が作られヒットしたことや、ラジオが普及したことにより、歌謡が興隆し始めたためである。歌謡が商売になることに気づいた新聞社や出版社は、レコード会社や映画会社と提携して歌謡曲の作詞募集をはじめ、歌謡の制定・選定に乗り出した。例えば、大阪毎日新聞、東京日日新聞が満州事変後の昭和7年に歌詞を公募した「爆弾三勇士の歌」はヒットし、人々の間で慣れ親しまれた⁸⁷⁾。また、新聞社の企画による「時局歌(軍国歌謡)」も同様に、次々と世に送られていった⁸⁸⁾。こうしたいわゆる「公募歌」の頂点は、昭和12年12月26日、日比谷公会堂から全国放送された《愛国行進曲》である。

このように、公募歌が戦争推進・愛国心の高揚に多大の貢献をすると信じられていた時代、少文協も同様に歌やかるたの句など、様々な作品を募集し、士気高揚を目指した。少国民への公募企画としては、「大東亜戦争一周年・国民決意」の標語の入選作品の一つである「欲しがりません勝つまでは」が有名である。この作品の作者が国民学校5年生ということで、一躍話題になった。国は、この標語を実に有効に機能させ、「少国民でさえ、こういつているのだから……」と国

民の欲求を抑えた⁸⁹⁾。

この時期における大きなイベントを見てみると、大きな流れがあった。戦争の進行という時代状況の中で、植民地アジアへの好奇心をかき立て、内なる敵、異端的思想の排除への国民の協力を取り付けるためであった⁹⁰⁾。もっとも、少文協による懸賞募集は、他国のネガティブなイメージを醸成させるものではなく、戦争下における少国民の決意や、兵隊へのねぎらいなど、戦争へのポジティブなイメージを浮かび上がらせる賛同だった。

2 懸賞募集の実態

少文協が一般大衆に対して募集した懸賞企画を、表4にまとめた⁹¹⁾。少文協が行っていた懸賞募集企画は、「少国民演劇脚本募集」や「新人・少国民募集作品募集」など毎月機関誌『少国民文化』で定期募集するもの、「愛国いろはかるた」や「少国民歌の歌詞募集」のように特別に企画募集され場合によっては販売にまで至るもの、『少国民進軍歌』や「少国民海の歌」など第Ⅱ章第2節で論じたようなイベントと連動させ相乗効果を狙ったものの三種類に分類することができよう。

懸賞募集の告知は、主に機関誌『少国民文化』や少文協の協会報、全国紙⁹²⁾において行われた。募集、受賞作品の選考、受賞作品の発表、そして特に優れた作品に至っては、大会等で発表されたり、商品化されたり、展覧会等で展示されるなどした。昭和18年末に開催された「軍人援護慰問帳と綴り方」や翌年の「鉱山従業者への慰問」に続き、「挙国石炭確保激励運動」を行うことになったが、これに連動して生産増強の基礎資源たる石炭増産に挺身しつつある従業者に対する慰問文と慰問画の募集を開始した。優良作品には軍需大臣の賞状および記念品が贈呈された。入賞作品は、いずれも対象者に献納され、少国民からのエールと位置づけられた。「愛国いろはかるた」や「愛国子守歌」に至っては、募集の締め切りや選定の状況など、逐一『少国民文化』上で進捗が発表された。例えば、「愛国いろはかるた」は、昭和18年2月の選定要綱⁹³⁾の決定から、3月3日の新聞ラジオ等での募集発表⁹⁴⁾を経て、昭和18年4月号に「奮つて御応募下さい！」と初めて『少国民文化』上で募集を呼び掛けた⁹⁵⁾のち、同月号の別のコーナー⁹⁶⁾でも企画の宣伝を行っていた。5月号では、「4月上旬現在18000通、10万余りの応募を得た」と応募の盛況ぶりを報じ⁹⁷⁾、5月5日の締め切りを迎え、最終的に26万句を得た⁹⁸⁾。9月号では永久に残るかるたの性質上慎重を期す必要があるた

表4 少文協による懸賞公募

年	月	懸賞企画名	主催／後援
17	5	第二回少国民海洋画展	日本海運報国団、日本海事振興会、少文協、少国民新聞／海軍省、文部省、遞信省、情報局
17	6	軍人援護に関する少国民製作のポスター	東京日日新聞社／軍事保護院、陸軍省、海軍省、文部省、情報局、少文協
17	7	軍人援護精神昂揚の綴り方募集	少文協／軍事保護院、陸軍省、海軍省、文部省、情報局
		新人創作募集	
		少国民作品募集	
17	8	軍人援護紙芝居コンクール	大日本書劇協会／少文協
17	9	『少国民進軍歌』	少文協、軍事保護院／
		少国民文化地方通信	
17	12	少国民「われらのちかひ」募集	
18	2	少国民演劇脚本募集	少文協
18	2	日本少国民文化協会	少文協
		紙芝居企画審査	
18	5	愛国いろはかるた	少文協／情報局、文部省、大政翼賛会
		少国民文化相談	
		原稿募集	
18	6	「少国民海の歌」	
18	7	軍人援護紙芝居競演会	
18	7	海洋少国民劇幻燈脚本当選者	
18		軍人援護 少国民の詩と綴り方作品	
18	8	鉾山戦士慰問作品	少文協、鉾山統制会／
18	9	少国民海事絵画作品展覧会	
18	12	軍人援護慰問帳と綴り方	少文協／情報局、文部省、軍事保護院
19	1	愛国子守歌	少文協、大日本婦人会、朝日新聞社／情報局、文部省、厚生省、大政翼賛会、日本放送協会
		少国民の詩と綴り方	
		少国民防空紙芝居脚本 勝ち抜く力	
19	2	幼児科学玩具の募集	
19	2	石炭増産協力	
19	7	「少国民海洋絵画」	少文協、船舶運営会、日本海運協会、大日本海洋連盟共同主催／情報局、文部省、海軍総局
19	9	少国民歌の歌詞募集	少文協／軍事保護院の指導、情報局、文部省、軍人援護会

め、発表を多少延期して完璧のものにする旨を発表した⁹⁹⁾。10月号¹⁰⁰⁾では入賞作品47句¹⁰¹⁾が掲載された。翌年2月号では、「愛国いろはかるた」を骨子とした童話が作成されることも発表された¹⁰²⁾。また、「愛国いろはかるた」は、募集から選定、販売まで、一般紙においても同様に告知がなされた¹⁰³⁾。

また、少文協の方針に沿う助言が寄せられることもあった。例えば、「新人創作の応募童話作品」では、「稚拙な擬人風な幼年童話で、大多数の作者は、童話をまだ芸術作品とは理解して居らず、従つて、吾々が新人に要求してゐるところのものからは、だいぶ距離がある」¹⁰⁴⁾との酷評を掲載し、次回作の入賞を読者に目指させた。このように、文章の生硬や表現など、純粋な文学的指摘も散見された。

表4からは、情報局だけでなく、文部省、厚生省、陸海軍省等の官公庁、大政翼賛会や軍事保護院等の国家機関、朝日新聞社や日本放送協会等のメディア等による強力なバックアップ¹⁰⁵⁾がなされていたことが分かる。懸賞募集は、前章で述べたイベントほど多く開催されることはなかったが、国家の将来を懸けた一大プロジェクトであったことが窺える。

懸賞募集が一番多く開催されたのは、昭和18年5月から12月までの8か月間である。「愛国いろはかるた」、「少国民海の歌」から「軍人援護慰問帳と綴り方」まで、毎月作品が募集された。懸賞募集に関しては、戦局にかかわらず、一貫して戦争や軍事関連のテーマとなっていた。とりわけ、昭和18年下旬になると、「軍人援護慰問」や「資源の増産協力」等、従来にはなかったテーマが掲げられるようになった。

また、集まった応募作品の数は、企画によって大きな差があった。「少国民演劇脚本募集」の応募数は平均50篇、「軍人援護紙芝居競演会」は48篇であったが、『少国民進軍歌』は1万7000曲、「愛国いろはかるた」に至っては、26万句の応募があったとされる。これは、新聞による告知¹⁰⁶⁾が功を奏した証左である。「愛国いろはかるた」は、企画から選定まで1年がかりであった。応募数の真偽のほどは定かではないが、それほどまでに注目度の高い企画が打ち出されていたのである。少文協が昭和19年に行った「少国民歌の歌詞募集」では、『お国のために』や『お山の杉の子』といった有名な歌曲が一般市民の手により生み出され、ラジオ番組「国民合唱」で歌われた合唱曲の一つになった¹⁰⁷⁾。例えば、『お山の杉の子』は、少国民だけでなく、大人にも親しまれるとともに、戦時期のみならず、戦後も歌い継がれた歌謡となった¹⁰⁸⁾。当時22歳の一般人吉田テフ子を書いた詞

に、作詞家のサトウハチローが修正を加えたものは、昭和19年11月に当選後、レコード7社専属作家の競作¹⁰⁹⁾による作曲を経て、4ヵ月後にレコード化され、世に出ることとなった。当時は、物資のない緊迫した時期であることから、『お山の杉の子』に対する期待度の高さを窺い知ることができよう。また、少文協のテーマソングといわれた『少国民進軍歌』も、懸賞募集企画の産物である。昭和17年10月3日から8日までの「軍人援護強化週間」の6日後の、「軍人援護少国民文化大会」で発表された。当時激増する戦傷軍人を援護するため¹¹⁰⁾、少文協と軍事保護院は共催で、歌詞の一般公募を行った。応募数1万7428編の中から、東京府西多摩郡大久野国民学校訓導だった、当時22歳の長坂徳治の作詞が当選した。これに佐々木すぐる¹¹¹⁾が曲をつけた。ラジオから放送される頻度数なども高く、当時の少国民にはヒットした歌であった¹¹²⁾。このように、少文協が行った懸賞募集には、実際に日の目を浴びることに成功した企画が少なからず存在する。

懸賞募集企画は、イベントとの相乗効果を狙って開催されることもあった。例えば、「全国少国民ミナウタへ大会」においては、『少国民進軍歌』がラジオ中継を通じて全国一斉に歌唱された¹¹³⁾。放送局というマスメディアが関係して歌詞を募集する「メディア・イベント」であったため、イベントの開催、懸賞募集の企画、宣伝等において、他の企画より優位性を持っていた。

「愛国いろはかるた」は、協会が直接制作に携わった唯一の少国民文化財¹¹⁴⁾となった。機関誌「少国民文化」にも繰り返し掲載されていたことから、熱の入れようが分かる。公募された読み句に文学部会会員が手を加えて47句が制定され、昭和18年8月に発表された。その後絵画部会会員が絵札を作成し、三種類の「愛国いろはかるた」が実際に発行されたのは、翌年2月頃であった¹¹⁵⁾。

綴り方という現代でいう作文は、学校教育において文字表現の創造的活動の一環として使われたが、少文協も綴り方作品の懸賞募集を数多く行った。綴り方のみならず、戦争の裏側では、様々な領域で文化創造の営みが試みられたのであった。

小 括

以上、本章では、少文協が一般大衆を対象に募集した懸賞企画に対して検討を加えた。懸賞募集のテーマは主に、軍隊や慰問など、戦争関連のものであった。また、少文協は、官庁だけでなく、新聞社や放送局などのマスメディアと共同で

懸賞企画を立て、作品の募集にあらゆる工夫を講じた。一方で、受賞作品に対する講評には、表現や対象に適切な作品であるかなど、文化雑誌ならではの厳しい論評も散見された。イベントや機関誌『少国民文化』による啓発普及とは異なり、少文協が企画した懸賞募集企画は成功したといえる。実際にヒット曲が生まれ出されるなど、社会に対して目に見える影響を及ぼしたからである。

結 語

本稿では、日中戦争が勃発し、戦時体制に向かっていく中で、日本少国民文化協会という団体がいかにして一般大衆に対して働きかけていったのか、機関誌『少国民文化』や協会報を通じて分析を行い、以下のことを明らかにした。

まず、第Ⅰ章では、少文協の概要から、児童文化の指導機関であることを明らかにした。協会の中核を担う役員には、文化人や教育関係者だけでなく、情報局の要人が複数おり、国の意向が反映されやすい環境にあった。また、少文協の設立過程や活動内容と、戦争の推移は密接に関係していた。昭和19年頃に戦局が悪化するまでは、士気高揚をすべく、企画が次々と展開されたのである。第Ⅱ章では、少文協の活動に検討を加えた。少文協の機関誌『少国民文化』は、当初は純粋な少国民の文化の育成を目指した内容であったが、戦局の悪化に伴い、戦時色が強まった。一方で、ある程度の非軍時的空間は確保されていた。また、少文協によるイベントは、絵の展覧会や大衆を集めての大会など、数多く開催された。戦局の悪化や協会内での意見対立により、必ずしも円滑な運営がなされたわけではなかったものの、戦争への士気高揚を図る宣伝ツールとしての工夫がなされた。第Ⅲ章では、少文協が一般大衆を対象に募集した懸賞企画に対して検討を加えた。戦時期において公募が隆盛を極めていたが、イベントほど多くは開催されなかった。メディアや官公庁の協力のもと、ヒット曲が生まれ出されるなど、少文協が実施した懸賞企画は成功したことが明らかになった。

以上のことから、少文協は、政官民合同によるものであるため、機関誌の広告展開やイベントの開催や宣伝、さらに公募企画の募集の呼びかけまで、ありとあらゆる事業が展開しやすい環境にあった。そのため、文化の力を借りて、少国民をはじめとする大衆の能動的な参加を引き出すことが可能であった。しかし、物資不足や厳しい戦局といった波には抗えず、必ずしも順風満帆な事業が展開されたわけではないことが明らかとなった。童心主義に基づいた文化による少国民の

育成を図りながらも、やがては錬成主義を唱える精神動員のための機関となり、少文協の仕事も疎開学童慰問が重要な任務となり、わずか3年の活動を終えたのである。

- 1) 当時は、少国民と称された。例えば、小学館の学年別学習雑誌「小学〇年生」は「国民〇年生」に、「小学生日本」は「少国民日本」、『大阪毎日新聞』と『東京日日新聞』の「小学生新聞」は「少国民新聞」に改題された。(山中恒『戦争の中の子どもたち』〈河出書房出版社、平成元年〉31頁)。
- 2) 浅岡靖央『児童文化とは何であったか』(つなん出版、平成16年)。
- 3) 浅岡靖央「1940年体制の児童文化」(『子どもの文化』38(7)(別冊)、〈文民教育協会子どもの文化研究所、平成18年〉)。
- 4) 鳥越信「日本少国民文化協会について」(『文学』29(8)〈岩波書店、昭和36年〉)。
- 5) 前掲、山中『戦争の中の子どもたち』。
- 6) 櫻本富雄『歌と戦争』(アテネ書房、平成17年)。
- 7) 大島弘夫「児童文化の擁護 出版界よ覚醒せよ! 悪質児童雑誌は摘発する」(『叢書 児童文化の歴史Ⅱ 児童文化と学校外教育の戦中戦後』〈港の人、平成24年〉)。
- 8) 同上。
- 9) 山本有三、城戸幡太郎、小川未明、坪田譲治、百田宗治、波多野完治、佐々木秀一、西原慶一、霜田静志の9人。同上。前掲、鳥越「日本少国民文化協会について」。
- 10) 小野俊一『社団法人日本少国民文化協会要覧』(日本少国民文化協会、昭和18年)。
- 11) 前掲、鳥越「日本少国民文化協会について」。
- 12) 指導理念を徹底させるために、日本児童絵本出版協会、関西児童絵本卸業協会、児童雑誌編集者会と、業者の職能別組織化が図られた。同時に、日本児童漫画家協会、少年作家画家協会等民間の児童文化団体も自発的に結成されたが、内務省においては指導する側とされる側とのより有機的かつ強力な連絡機関の設置に向け、先の九人に加え、北原白秋、岡本一平、武井武雄、村岡花子の四人を新たに加えて、指導機関設立の具体化を図った。内務省の動きとは別に、文部省は昭和14年5月、従来の図書推薦事業の内容を拡大して新しく児童図書をその中に加え、商工省物価局は、昭和15年8月に玩具及び人形類の公定価格が定められたのを機に、日本玩具文化協会を設立させるなど、児童文化財の各分野にわたる統制と指導がようやく強まっていく。(前掲、鳥越「日本少国民文化協会について」)。
- 13) 前掲、浅岡『児童文化とは何であったか』161頁。
- 14) 前掲、小野『社団法人日本少国民文化協会要覧』。
- 15) 前掲、鳥越「日本少国民文化協会について」。
- 16) 前掲、浅岡『児童文化とは何であったか』166頁。
- 17) 前掲、鳥越「日本少国民文化協会について」。
- 18) 設立準備委員は民間側から城戸幡太郎、百田宗治、波多野完治、上村哲弥、藤

田圭雄、吉田甲子太郎、滑川道夫、羽仁説子、稲田達雄、武井武雄の10名、官側から井上司朗（情報局）、前田福太郎（商工省）、長野実（厚生省）、坂本越郎（文部省）、佐伯郁郎（内務省）、千賀明（警視庁）の6人（同上）。

- 19) 前掲、鳥越「日本少国民文化協会について」。
- 20) 情報局第五部三課が設立を担当した。事務分掌は「文学、音楽、美術其ノ他芸術一般ニ依ル啓発宣伝ノ実施及指導」、局内の他の部署の管轄に属さない「国民文化ノ指導及普及」、「各種文化団体ニ関スル事項」を含んでおり、「日本児童文化協会の育成」も具体的な職務の一つとされていた。その他、当時の思想・言論空間を統制していた情報局関連の主要人物として、佐伯郁郎、波多野完治の2名が挙げられる。佐伯郁郎（本名は慎一）は、明治34年、岩手県生まれ。早稲田大学仏文科卒業後、内務省に入省して同省警保局図書課（後に検閲課）課員となり、以後、検閲・調査・企画等に携わった。佐伯は内務省警保局図書課が文化統制の一環として児童読物の統制に着手した際にその中心となり、「児童読物改善ニ関スル指示要綱」をまとめた。これ以降、児童文化全般に対する国家統制が官民合同によって進められていく過程で官庁側の中心人物として活動し、少文協の創立に主導的役割を果たした。昭和16年1月には、新聞・雑誌・出版物・映画・蓄音機レコード・演劇・演芸の検閲取締を担当する情報局第四部第一課と内務省警保局図書課企画係を兼任することとなった。その創立に至る段階で、同協会の主務官庁になった情報局の第四部第一課員も兼務することとなり、創立後も監督官として同協会を指導していった。（浅岡靖央「佐伯郁郎「児童文化に関する覚書」の改題」〈前掲、『叢書 児童文化の歴史Ⅱ 児童文化と学校外教育の戦中戦後』〉）。波多野完治は、明治38年、東京生まれ。東京帝国大学文学部心理学科卒業後、法政大学講師を経て同大教授となった。同時に、教育科学研究会など民間教育運動に関わり、児童心理学の立場から幅広い影響を及ぼした。少文協創立後は、付属の日本少国民文化研究所課長を昭和19年初めまで務めた。波多野は、「児童読物改善ニ関スル指示要綱」の作成に民間識者側の一人として参加したことを契機に、官側の佐伯とともに、その後展開されていった官民合同による児童文化統制において民間側の中心人物の一人となった。特に、児童心理学に基づく、子どもを社会的な存在とする児童観と、教育を生産力の再生産と捉える生産力理論とによって、児童文化統制に理論的な方向付けを与え、少文協の設立に大きく寄与した。（浅岡靖央「波多野完治「新児童文化の体制」の解題」〈前掲、『叢書 児童文化の歴史Ⅱ 児童文化と学校外教育の戦中戦後』〉）。
- 21) 前掲、鳥越「日本少国民文化協会について」。
- 22) 佐伯郁郎「日本少国民文化協会の設立まで」（『新児童文化』第四冊〈昭和17年、有光社〉）。
- 23) 櫻本富雄『少国民は忘れない』（社会評論社、昭和57年）224頁。
- 24) 「佳き日に少国民文協発足」（『朝日新聞』昭和16年12月24日夕刊2面）、「日本少国民文化協会きょう誕生、各部の幹事長決る」（『読売新聞』昭和16年12月24日夕刊2面）。

- 25) 増井真琴「小川未明と日本少国民文化協会：日中・「大東亜」戦争下の歩み」（北海道大学文学研究科、平成29年）[https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/67986/1/17_013_masui.pdf] 平成30年12月4日アクセス。
- 26) 山中恒「うたは忘れない 少国民の音楽体験（9）少文協が歌で少国民にしたこと」（『教育音楽』39（6）（450）小学版〈音楽之友社、昭和59年6月〉）。
- 27) 「少国民文協発足す」（『朝日新聞』昭和17年2月12日朝刊3面）、「来るべき国家の礎 少国民文化協会発足」（『読売新聞』昭和17年2月12日夕刊2面）。
- 28) 香山登一「少文協時代の思い出」（『日本児童文学12（2）111』、日本児童文学者協会、昭和41年2月）。
- 29) 地方にも支部が置かれ、少文協の諸事業に関する参画並びに実施等の活動を行った。
- 30) 小野俊一は、明治25年生まれ。社団法人工政会常務理事。大政翼賛会中央協力会議員。動物学者、社会運動家。『役員名簿』（日本少国民文化協会、昭和17年6月）、nichigai web service『who plus』平成31年1月17日アクセス。
- 31) 神村朋佳「日本少国民文化協会の使命」（前掲、『叢書児童文化の歴史Ⅱ 児童文化と学校外教育の戦中戦後』）。
- 32) 日本少国民文化協会『社団法人日本少国民文化協会 設立趣意書・定款並諸規定』（日本少国民文化協会）。
- 33) 前掲、小野『社団法人日本少国民文化協会要覧』。
- 34) 前掲、日本少国民文化協会『社団法人日本少国民文化協会 設立趣意書・定款並諸規定』。
- 35) 昭和19年11月には「蓄音機レコードレコード部会」が「音盤部会」に、「童話部会」が「談話部会」に正式に名称変更。「協会特報」『少国民文化』昭和19年11月号。
- 36) 前掲、鳥越「日本少国民文化協会について」。
- 37) 同上。
- 38) 同上。
- 39) 「少国民文協の新事業」（『朝日新聞』昭和18年6月19日朝刊3頁）。
- 40) 『日本少国民文化協会報』第八号（日本少国民文化協会、昭和17年7月10日）。
- 41) 「協会の活動」『少国民文化』昭和18年7月号。
- 42) 「協会の活動」『少国民文化』昭和18年11月号。
- 43) 前掲、酒井「日本少国民文化協会（1941～45年）の事業について」。
- 44) 同上。
- 45) 浅岡靖央「1940年体制の児童文化」（『別冊 子どもの文化 No.8』〈文民教育協会子どもの文化研究所、平成18年〉）。
- 46) 山本明「十五年戦争末期の雑誌（三）少国民文化協会の出版物」（『評論・社会科学』第27号〈同志社大学人文学会、昭和60年〉）。
- 47) 前掲、浅岡「1940年体制の児童文化」。
- 48) 前掲、山本「十五年戦争末期の雑誌（三）少国民文化協会の出版物」。

- 49) 「解散公告 社団法人日本少国民文化協会清算事務所」(『読売新聞』昭和20年10月28日朝刊2面)。
- 50) 「(広告) 日本少国民文化協会「少国民文化」」(『朝日新聞』昭和17年6月3日夕刊1面、同年7月3日朝刊2面)。
- 51) 明治26年生まれ。詩人、児童文学者。詩の傾向は人道主義・民主主義的傾向で、対象7年に創刊された『民衆』を契機として民衆詩派の一員として数えられるようになる。nichigai web service 『who plus』平成31年1月17日アクセス。
- 52) 『日本少国民文化協会報』第一号(日本少国民文化協会、昭和17年)。
- 53) 前掲、前掲、小野『社団法人日本少国民文化協会要覧』。
- 54) 『日本少国民文化協会報』第三号(日本少国民文化協会、昭和17年)。
- 55) なお、当時は各種雑誌の統合整理が行われ、教育児童文化雑誌の場合も『教育児童話研究』『少年文学』『童話精神』等が昭和16年にはその枠の中で姿を消した。前掲、鳥越「日本少国民文化協会について」。
- 56) 前掲、鳥越「日本少国民文化協会について」。
- 57) 「編集後記」『少国民文化』昭和19年3月号。
- 58) 弘報課「本誌四月号休刊」(『少国民文化』昭和19年5月号)。
- 59) 前掲、山本「十五年戦争末期の雑誌(三) 少国民文化協会の出版物」。
- 60) 「驕敵撃滅のために 貴下の持つ銀を国家は必要とする」(『少国民文化』昭和19年11月号)。
- 61) 『日本少国民文化協会報』第十四号(日本少国民文化協会、昭和19年)。
- 62) 「特集」が掲載されていた『少国民文化』昭和17年10月号から昭和19年2月号より作成した。
- 63) 前掲、酒井「日本少国民文化協会(1941～45年)の事業について」。
- 64) 座談会が掲載されていた『少国民文化』昭和17年6、7、10、11、12月号、昭和18年1、2、3、4、5、11月号、昭和19年6、8、11、12月号より作成した。
- 65) 「漁村における少国民文化」『少国民文化』昭和18年8月号。
- 66) 「少国民の興亜教育」『少国民文化』昭和18年3月号。
- 67) 『少国民文化』全号より作成した。
- 68) 『少国民文化』昭和18年9月号。
- 69) 『少国民文化』昭和18年10月号。
- 70) 『少国民文化』昭和18年12月号。
- 71) 「少国民文化相談」『少国民文化』昭和18年4月号。
- 72) 「協会の活動」『少国民文化』昭和17年6月号。
- 73) 『少国民文化』全号より作成した。
- 74) 前掲、酒井「日本少国民文化協会(1941～45年)の事業について」。
- 75) 津金澤聰廣・有山輝雄『戦時期日本のメディア・イベント』(世界思想社、平成10年)153頁。
- 76) 前掲、酒井「日本少国民文化協会(1941～45年)の事業について」。
- 77) 前掲、浅岡「1940年体制の児童文化」。

- 78) 前掲、山中恒「うたは忘れない 少国民の音楽体験 (9) 少文協が歌で少国民にしたこと」。
- 79) 西正世志「奮へ日本少国民」(日本教育畫劇、昭和17年)。
- 80) 「お待兼ねの少国民壁新聞」(『朝日新聞』昭和17年11月13日夕刊2面)。
- 81) 「協会の活動」『少国民文化』昭和17年12月号。
- 82) 前掲、櫻本『少国民は忘れない』172頁。
- 83) 前掲、酒井「日本少国民文化協会(1941~45年)の事業について」。
- 84) 「オモチャ戦時色」(『読売新聞』昭和18年7月22、24、25、27日朝刊4面)。
- 85) 前掲、浅岡「1940年体制の児童文化」。
- 86) 前掲、酒井「日本少国民文化協会(1941~45年)の事業について」。
- 87) 櫻本富雄『歌と戦争』(アテネ書房、平成17年)18頁。
- 88) 前掲、津金澤・有山「戦時期日本のメディア・イベント」39頁。
- 89) 前掲、山中『戦争の中の子どもたち』76頁。
- 90) 前掲、津金澤・有山「戦時期日本のメディア・イベント」125頁。
- 91) 『少国民文化』全号より作成した。
- 92) 例えば、「少国民進軍歌」の募集に際しては、開催の趣旨や応募要項、副賞等が記事として掲載された(「歌に盛る感謝と援護 全国から『少国民進軍歌』を募集」(『朝日新聞』昭和17年8月30日朝刊3面))。
- 93) 選定要綱の趣旨に、次の一節がある。「愛国精神をこれからの日本を担ひ大東亜を築いていく少国民に深く植えつけて、その日常の遊びの中で自然に愛国心を養はせる」西山利佳「二つのカルタを通して平和を考える」(『子どもの文化 2009年11月号』、子どもの文化研究所)。
- 94) 同上。
- 95) 「少国民文化通信」『少国民文化』昭和18年4月号。
- 96) 「協会の活動」『少国民文化』昭和18年4月号。
- 97) 「協会の活動」『少国民文化』昭和18年5月号。
- 98) 前掲、西山「二つのカルタを通して平和を考える」。
- 99) 「協会の活動」『少国民文化』昭和18年9月号。
- 100) 「日本小国民文化協会制定 愛国いろはかるた」『少国民文化』昭和18年10月号。
- 101) 「い 伊勢の神風敵国降伏」「ろ 爐端で聞く先祖の話」「は 「ハイ」ではじまる御奉公」「に 日本晴の天長節」「ほ ほまれは高し九軍神」等。同上。
- 102) 「協会の活動」『少国民文化』昭和19年2月号。
- 103) 例えば、募集については、「愛国いろはかるた募集 口調よい句を」『読売新聞』昭和18年3月3日朝刊3面、完成の報告については、「つぎの日本僕等が担うヨイコへ『愛国いろはかるた』」『読売新聞』昭和18年8月21日朝刊3面、完成品の紹介については、「愛国いろはかるた」『読売新聞』昭和19年2月2日朝刊3面がある。
- 104) 「新人創作応募童話作品審査発表 第一回」『少国民文化』昭和18年7月号。
- 105) 受賞作品の発売後も新聞が紙面に繰り返し広告を掲載し、大衆からの関心を集

- めるバックアップ体制がとられた。以下、広告の掲載例である。「少国民進軍歌／コロムビアレコード」（『読売新聞』昭和17年10月23日夕刊1面、10月28日夕刊2面、10月30日夕刊2面、11月6日夕刊1面、11月15日朝刊3面、11月20日夕刊1面、11月29日朝刊4面、12月24日夕刊1面）。
- 106) 「愛国いろはかるた募集 口調よい句を」（『読売新聞』昭和18年3月3日朝刊3面）、「愛国いろはかるたを募集」（『朝日新聞』昭和18年3月3日朝刊3面）、「『少国民進軍歌』を募集」（『読売新聞』昭和17年8月30日朝刊3面）、前掲「歌に盛る感謝と援護 全国から『少国民進軍歌』を募集」。
- 107) 前掲、櫻本『歌と戦争』。
- 108) 楠木繁雄「お山の杉の子—吉田テフ子」（『児童文学研究（6）』（日本児童文学学会、昭和51年））。
- 109) 長田暁二「昭和の童謡史」（『児童文芸』31（4）（日本児童文芸家協会、昭和60年））。
- 110) 八巻明彦『軍歌歳時記』（戦誌刊行会、昭和61年）198頁。
- 111) 佐々木すぐるは、明治25年兵庫県生まれ。東京音楽学校甲種師範科卒の作曲家。代表作に、「月の砂漠」「青い鳥」「お山の杉の子」等がある。長田暁二『戦争が遺した歌』（全音楽譜出版社、平成27年）663頁。
- 112) 前掲、山中「うたは忘れない 少国民の音楽体験（9）少文協が歌で少国民にしたこと」。
- 113) 『日本少国民文化協会報』第一号（社団法人日本少国民文化協会、昭和17年）。
- 114) 前掲、浅岡「戦争政策としての少国民文化」。
- 115) 同上。